

高利貸し

借金
の形に取られるのは、
美女の
人肉

作者
大黒達也



「高利貸し」

作者 大黒 達也

あらすじ

借金返済ができず、大勢の老人達を相手とした売春を強いられ、最後には食材として調理され、彼らに食り食われる若く美しいOLの運命。カニバリズム（人肉嗜食）小説。

目次

プロローグ

第一章 売春

第二章 極上の食材

第三章 人肉バイキング

第四章 エピローグ

プロローグ

藤沢ゆかりは、暗い路地裏をひとりで歩いていた。日光がほとんど差し込まない路地にはゆかり以外の人影は見られなかった。路地の突き当たりに、村田商会と書かれた古びた看板が見えた。蔦が這いまわる四階建てのビルには、窓がない鋼鉄製のドアがあった。ゆかりは躊躇いがちにドアを開けた。

「遅かったね。残金是用意できたかい？」

薄暗い廊下の奥から、老婆のしわがれた声が聞こえて来た。

「……」

「何をぼさつとしているんだ。早くこつちに来るんだよ」

ゆかりは決心したように、薄暗い廊下を歩き始めた。廊

下の奥には十畳ほどの事務所があり、それに通じるドア

は開け放たれていた。

「そこにお座り」

老婆の声が事務室の奥から聞こえて来た。ゆかりは、事務所の片隅に置かれた二人かけのソファに腰掛けた。

「本当にあんたはきれいだね」

黒いスーツに身を包み、白髪に深い皺が刻まれた顔をしたら老婆が、ゆつくりとした足取りで近付いてきて、ひとり掛けのソファに座った。老婆が感心するほどにゆかりは美しかった。年齢は二十代半ばといったところか。肩まで伸ばしたストレートの茶髪に、くつきりとした二重瞼を持ち、愛くるしいという表現がぴったりの顔立ちをしていた。

ゆかりは老婆のいやらしい視線を避けるためにミニスカ

ートから食み出した長い太腿を両手で隠した。

「済みません。もう少し返済を待っていただけないでしょうか？」

ゆかりは蚊の泣くような小さな声で言った。

「何だって！冗談じゃないよ。一千万円耳をそろえて返してもらうよ」

「一千万ですって！借りたのは百万円でしたよ」

「馬鹿言うんじゃないよ。利子がつくのは当たり前だろう」

「そんな……」

「この証書にちゃんと書いている筈だよ。それにね。期限を守れない場合は、貸主の提示する条件に従うともね」
老婆は勝ち誇ったような顔をして、証書をゆかりに見せ

「一千万円なんてお金はお支払いできません」

ゆかりは今にも泣き出しそうだった。

「仕方がないね。金がないなら、身体で返してもらおうよ。

さあ、ぼさつとしてないで、着ている服を全部脱ぐんだ」

「……」

老婆の手には、まるで手品のように黒光りする拳銃が握られていた。銃口にはサイレンサーが付けられていた。

「玩具じゃないよ。トカレフっていう銃だ。心臓を撃ちぬいてやろうかい？」

ゆかりの大きな瞳が見開かれた。憑かれたような表情で拳銃を見詰めていた。老婆がゆかりの横に銃口を向けた。小さな擦過音がして、ゆかりの近くに置かれたソファアマットに小さな穴が開いた。

ゆかりが目は大粒の涙を溜めて、震え上がった。

「次は大きなおっぱいを撃ちぬいてやるよ。さあ。早く

お脱ぎ！」

老婆がゆかりの胸に狙いをつけると、ゆかりは鳴咽を漏らしながら白いタンクトップTシャツを脱ぎ始めた。鳴咽を漏らしながらミニスカートを脱いで下着だけになった。

「ブラジャーもパンティも脱いで素っ裸におなり」

ゆかりは呆然とした表情で、ブラジャーを外しパンティを脱いだ。老婆はゆかりが脱いだパンティを手にとり、匂いを嗅いだ。

「なかなか聞き分けがいいね。うーむ。いい匂いだ。メスの香りがするね。若い娘のパンティは高い値がつくん

老婆はスーツの内ポケットから黒いビニール袋を出して、中にゆかりが身に付けていた衣服を入れた。

「今度は、そこに立って向こう側を見るんだ」

ゆかりは言われるままに立ち上がり、老婆に背中を向けた。

「何てきれいなケツをしているんだ。すべすべで肌触りも最高だね」

皺だらけで骸骨のような指が、ゆかりの尻を這い回っていた。

アヌスにも軽く触ってきた。

「さあ、手を後ろに回すんだよ」

後ろ手を老婆に掴まれ、すぐにガチャリという音が聞こえてきた。どこから出したのか、手錠を掛けられていた。



「さあ、これで安心だね」

老婆はゆかりをソファに横たえ、上に覆い被さった。

ゆかりの盛り上がった白い乳房に食らいつき乳首を口に含んできた。

「や……やめて！」

ゆかりは声を限りに泣き喚いた。

「いい声で泣くね。お前は」

老婆は、ゆかりの美しい乳房を交互に舐め回した。身長百六十五センチ近くあるゆかりに対し、老婆は百五十センチに満たなく、まるでヤモリが張り付いているようだった。存分に乳房を楽しんだ後で、ゆかりを四つん這いの姿勢にし、シミひとつない剥き卵のような白い尻の割れ目を覗き込んできた。

「いい眺めだよ。本当にきれいなケツだね。匂いもしないね。ウオシシュレット使っているのかい？」

すぐに深い尻の割れ目に顔を押し付けてきた。ゆかり

はアヌスに熱い舌先を押し付けられるのを感じた。それはアヌスを挟じ開けようと執拗に舐ってきた。アヌスを舐られながら、膣やクリトリスを皺だらけの指先で弄ばれた。暫くの間、老婆はそうやってゆかりのアヌスを味わっていた。

ゆかりは嫌悪感に苛まれながらも、身体の芯が熱くなってくるのを感じていた。手錠を嵌められ、素っ裸にされて獣のように下半身を弄ばれているのだ。

老婆が動いた。今度はゆかりを仰向けに横たえ、まんぐり返しにして膣に喰らい付いてきた。熱い舌が、膣やクリトリスの上を這い回っていた。ゆかりは泣き腫らした顔で、呆然と天井を見上げていた。

第一章 売春

ゆかりは、窓も無く裸電球のみの明かりに照らし出された薄暗い部屋で目覚めた。ベッドの上に仰向けで横たわっていた。後ろ手に手錠を嵌められたままだった。手首が少し痺れていた。さらに、股間から伝わる異様な感覚を覚えていた。ゆかりは首をもたげ、下半身の方に視線を向けた。誰かが張り付き、ゆかりの膣を舐めていた。

「いや！」

ゆかりは声を張り上げた。

「お目覚めかい？あんた。本当に可愛い顔をしているな」
皺だらけで、顔中に老人性色素斑と呼ばれるシミが浮かぶ八十代くらいの男が満面に笑みを浮かべていた。男は白いシャツを着ていた。

「だ……誰なの？」

ゆかりは何とか声に出して言うことができた。

「俺のことかい。勝子の幼友達だよ。竹蔵っていうんだ」

ゆかりは、あの老婆の名前が勝子であるというのを思い出した。

「何をしているんですか？」

「あんたのことを買ったんだよ。勝子から。高かったんだぜ。なけなしの年金を出したんだ」

「お願い。助けて下さい」

ゆかりは目に大粒の涙を溜めて懇願した。

「冗談じゃない！勝子にぶち殺されちまうよ。お嬢さん。

諦めることだ。さあ、時間が無いんだ」

竹蔵が、再びゆかりの股間に顔を押し付け、膣やクリトリスを激しい勢いで舐り始めた。皺だらけの手がゆかり

12 の寝ていても崩れない乳房を揉みしだいていた。竹蔵の

薄い白髪頭が股間で蠢いていた。竹蔵の手により、裏返しにされた。ゆかりは尻の割れ目に竹蔵の洗い吐息を感じていた。

「きれいだ。こんな素晴らしい尻は初めてみた」

背後から竹蔵の上擦った声が聞こえて来た。すぐに尻を両手で割られ、ざらついた舌をアヌスにあてられた。皺だらけの指先を膣の中に差し込まれ中をかき回された。それから暫くの間、アヌスを舐られ、膣内を指で弄ばれた。

ゆかりは、醜い老人にアヌスを舐られ、激しい嫌悪感に苛まれながら、感じていた。何ども鋭い快感が背筋を走り抜けた。老人は舌や手を使うだけで挿入してこようとはしなかった。

13 再び仰向けにされ、長く形のよい太腿を持ち上げられ、

まంగり返しの姿勢を取らされた。竹蔵のざらついた舌がクリトリスを重点的に刺激してきた。ゆかりは目を閉じ、美しい額に皺をよせていた。絶頂が迫っていた。部屋に響きあがる鋭い喘ぎ声をあげて、背筋を反らせた。

「よかったよ。じゃあ。元気でな」

竹蔵の声が遠くから聞こえてきた。ゆかりはベッドの上に横たわり、意識が遠のいていった。意識を失っていたのは、ほんの少しの間だった。すぐにドアが開く音が聞こえて来た。竹蔵と同じような年恰好をした老人が、満面の笑みを浮かべ、ベッドサイドから見下ろしていた。

「……」

「美味そうな女子だな……」

その老人は口元に涎をたたえていた。骸骨のように痩せ

14 た手が、伸ばされ、竹蔵の唾液で濡れた膣を鷲掴みにさ

れた。

「お願い。もう許して……」

「声もいいな。天女のようにだわい」

老人のもう一方の手も伸びてきて、アヌスの中に指先を捻じ込んできた。

「いや！」

直腸をかき回されるおぞましさに、絶叫を上げ背筋を仰け反らせた。

五分後、ゆかりはその老人の前に、ベッドの上で四つん這いの姿勢を取らされていた。両手を背後で拘束されているので、上半身を首で支えなければならなかった。背後から老人が、尻の割れ目を食い入るように覗き込んで

「お尻様じゃ。尊いのう」

意味不明のことを呟きながら、両手でゆかりの尻を鷺掴みにして押し広げ、割れ目に顔を押し付けてきた。すぐにピチャピチャとアヌスを舐める音が聞こえて来た。淫らかな舌が尻の割れ目を這い回っていた。ゆかりはあまりの快感に気が狂いそうになっていた。嫌悪感は薄れていた。それから十人くらいの老人達が、交代でゆかりを抱いた。しかし、本番行為に及ぶ者はなく、手と口で全身を嬲らせた。ゆかりは何ども失神と覚醒を繰り返していた。

「随分と稼いでくれたね。元金は回収できたよ。後は利子が残っているけどね」

気がつくつと、高利貸しの飯田勝子が皺だらけの顔で、ゆかりの下半身を舐め回すように見ていた。

「何、言っているんだい。お前にはこれから十分に稼いでもらわないとね。まあ、利子分を返すのは難しいと思うけど」

勝子の皺だらけの手が、尻の上を撫で回していた。

「どうすればいいんですか？」

「どうしようもないね。そのうちわかるよ」

勝子は謎めいた笑いを浮かべながら、膣を触ってきた。

「少し匂ってきたね。無理ないか。爺さん達の涎だらけだからね。さあ立ちな」

その後、ゆかりは、その部屋に備え付けられていたバスルームに引き立てられた。後ろ手を手錠で拘束されているので、従うしか無かった。ちよつとでも反抗すれば、

勝子は拳銃をちらつかせた。バスルームでは勝子によつ

17 て、シャワーで全身を洗い清められた。膣やアヌスは丹

念に洗われた。勝子も衣服を脱ぎ、醜い裸身を晒していた。

「お願いトイレに行かせて」

シャワーで洗われながら、鋭い尿意を感じていた。

「小のほうかい？」

「……」

ゆかりは何ども頷いた。

「じゃあ。ここですればいいよ。若い娘がオシッコ垂れるのは見物だろうね」

「お願いです……。漏れそうなんです」

「だから、ここですろといっているだろう！」

勝子が声を荒げた。ゆかりの前に膝立ちとなり、膣に口をつけてきた。もう限界だった。

叫びながら、勝子の口内に放尿した。激しい脱力感を感じていた。

「ああ。美味しかった。若い娘は小便まで美味ときいてる。肌にいいんだよね。これが」

その後、ゆかりは勝子に股間を洗われ、隣りの部屋に引き立てられた。その部屋は大きな厨房であり、巨大な鍋やフライパンが置かれていた。厨房の一角に食卓テーブルが置かれてあり、テーブルには、血の滴るようなステーキや、山盛りの野菜サラダが入ったボール皿や、メロンやブドウ等の果物が盛られた大皿が載せられていた。ゆかりは全裸のまま、椅子に座らされた。勝子が隣りの席に座った。勝子は血の滴るようなステーキをナイフとフォークを使って器用に食べ始めた。

あいつ……いやこの肉は最高に美味いね。脂の載りもち
ようどいいよ。知っているかい？この肉は牛じゃないけ
ど。最高級の和牛が、処女の雌牛だということを。そう
だね。人間の歳で言えばお前くらいなのかな。お前の肉
も美味しそうだね」

勝子は肉を頬張りながらゆかりの乳房を舐め回す様に見
た。ゆかりは空腹を感じていた。テーブルの上にはステ
ーキ皿が一皿のみでゆかりの分は見当たらなかった。

「そうそう。お前も食べないかね。明日もたんと働いて
もらうんだから」

勝子は、大皿に載せられたメロンを取り上げ、果物ナイ
フで実を切り取って、皿に盛り付け、ゆかりの前に置い
た。

からね」

「どうやって食べればいいのですか？」

ゆかりは後ろ手を手錠で拘束されたままだ。

「犬のように食べばいいじゃないか。簡単だろう？早く食いな。寝る前にまだやることがあるんだ」

勝子が持っていたナイフをゆかりの首筋にあてた。ゆかりは仕方なく、口で直にメロンに食いつき、犬のように食べ始めた。メロンを食べ切った頃に、今度は五百CCの缶ビールを一缶目の前に置かれた。

「酒は飲めるんだろう？飲めなきゃ無理矢理飲ませるからね。これから食後は必ずビールを飲んでもらうよ」

「……」

勝子は缶ビールの蓋を開け、ゆかりの髪を鷲掴みにして、

21 口に押し付けるようにして飲ませた。幸いにもビールは

嫌いでは無かった。

「けっこういける口じゃないか」

食後は、厨房の洗い場に横たえられた。全身に冷たい瓶ビールの中身を注ぎかけられ、ブラッシングされた。最後には冷水でビールを洗い流された。それが終わると勝子の寝室に連れて行かれた。寝室は三十畳ほどもあり、広大なダブルベッドが中央に鎮座していた。片側の壁一面がクロークの造りになっていた。他に豪華な感じの化粧台が壁に組み込まれていた。

「窓は防音施工になっているから、どんなに叫んでも表には聞こえないよ」

首輪をされた。鎖の先は床にしつかりと固定されていた。後ろ手も手錠で拘束されているので、逃亡は不可能であった。パジャマに着替えた勝子によつて、ベッドの上に素っ裸のまま、横たえられた。両足を大きく持ち上げられ、マングリ返しの姿勢を取らされ、膣やアヌスやクリトリスを勝子が気の済むまで舐められた。最後に勝子はゆかりをうつ伏せに寝かせ、尻の合間に顔を入れ、寝息を立て始めた。ゆかりは中々寝付かれなかった。これから自分の運命を思うと、不安で胸が苦しくなった。いつになったら、解放されるのか見当もつかなかった。解放される日はくるのであろうかと、脳裏に重苦しい不安がよぎっていた。

翌朝、ゆかりは勝子によって叩き起こされた。まっさきに、勝子の部屋のバスルームに引き立てられ、空のバスに上半身を落とし込まれ、剥き出しにされたアヌスに何かを差し込まれた。

「浣腸したことあるかい？」

背後から勝子の嬉しそうな声が聞こえて来た。直腸に冷たい液体を注ぎ込まれた。すぐに激しい便意が襲ってきた。

「……」

勝子によって、バスタブから引き上げられ、近くの便座に座らされた。

「これからウンチをするにもアタイの許可がいるんだよ。お前は家畜に過ぎないのさ」

ゆかりは俯いて、小さな声で呟くように言った。

「いいから。早くするんだよ。お前のことを皆が待っているんだ」

我慢も限界だった。不意にブリブリと排泄物がひじり出される音が聞こえて来た。

「美人でも糞は臭いね！」

ゆかりは朦朧とした意識の中で勝子の笑い声を聞いていた。その後で勝子によって、シャワーで全身を洗い清められた。朝食も果物と缶ビールのみだった。朝食後、再び窓の無い部屋に連れて行かれた。すぐに老人達が訪れ、ゆかりのことを抱いた。皆、相変わらず舌と手でゆかりの全身を弄ぶのみで、本番行為に及ぶ者はいなかった。

三日目の朝、勝子の部屋でいつものように目覚めると、見知らぬ女が勝子とともに全裸姿のゆかりをベッドの側から見下ろしていた。女は身長二メートル、体重百キロ以上はあると思われる巨体の持ち主だった。年齢は四十代から五十代前半といったところだ。超え太った顔に冷たい光を放つ瞳を持っていた。

「叔母さん。もの凄く可愛い娘じゃないかい。極上だね」
「そうだろうか？顔だけじゃないんだ。指を入れてごらん」
巨体の女が、腰を屈めてゆかりの腹部を片手で押さえつけ、空いている方の手を股間に差し込んできた。女の図太い指先が乾いた膣に捻じ込んできた。

「い……痛い！」

ゆかりは、女の指から逃れようとしたが、腹部を押さえられており、まったく動けなかった。

「凄い！締め付けるね。男なら十秒ももたないよ」

女は感心したように言った。

「熊美も気に入ってくれたようだね」

勝子は熊美の指先が、ゆかりの膣に出し入れされる様子を食い入るように見詰めていた。

「ああ。これなら大金出しても惜しくないよ」

熊美の手がゆかりの腹部から、寝ていても崩れない豊かな乳房に移動して、鷺掴みにした。ゆかりは観念したのか、呆然とした表情で天井を見ていた。

「お前もアタイと同じで、可愛い女に目が無いからね。」

お前は身内だから半値にまけてあげるよ」

「本当？ありがたいよ。私は、いい男を無理矢理犯すのも好きだけど、可愛い女をいたぶる方がずっと興奮する

熊美が満面の笑みを浮かべて、言った。

「若い女の肉の方が美味しいしね」

「そうだね。今度は尻を拝ませてもらおうよ」

熊美はゆかりの太腿を片手で掴み、軽々と裏返しにした。

「きれいなケツだね。本当、惚れ惚れするよ」

「匂いも嗅いでごらん」

ふたりは腰を屈め、ゆかりのすべすべで剥き卵のように

白い尻をまじかに見ていた。

熊美が両手でゆかりの尻を割って、割れ目に顔を押し込んできた。巨大な舌がゆかりの尻の合間を這い回っていた。

「うーむ。最高だね。叔母ちゃん。もう我慢できないよ。

この部屋貸してくれない？」

「しょうがないね。可愛い姪っ子の頼みとあっちゃ、聞かないわけにはいかないよ。自由に使っていいよ。そのかわりここで見ていていいかい？」

勝子の口元が愉快そうに緩んでいた。

「もちろんさ。それと手錠の鍵を貸してくれないかな。

何か邪魔なんだ」

「そうだね。お前が来てくれたんなら、いらないかね」

勝子はスーツの懷から、手錠の鍵を出してゆかりを拘束していた手錠を外した。

「じゃあ、そろそろ始めるね」

熊美は、近くの横に置いておいたボストンバックをナイトテーブルの上に置き、中身をテーブルの上に並べ始めた。様々な種類のバイブレータや鞭や張形や浣腸器が所狭しと並べられた。ゆかりは放心したような表情でそれ

らを見詰めていた。

「随分と持ってきたね」

勝子が感心したように言った。

「これ全部で犯られたら、大抵の女は潮吹いて、逝っちゃうんだよ」

熊美が着ていた衣服を脱ぎ始めた。下着も脱いで全裸になった。スポーツで鍛えたのだろうか、全身が筋肉で覆われていた。巨大な乳房が唯一女らしい部分であった。

股間には凶太い張形が装着されていた。熊美は、蒼白な顔をしたゆかりを仰向けに横たえ、荒々しい手付きで、盛り上がった白い両乳房を揉みしだいた。

「超柔らかいね。気に入ったよ」

「い……痛いです」

熊美はおもむろな感じで、ゆかりのアヌスに指先を捻じ込んできた。荒々しく内部を掻き回した。

「嫌！」

ゆかりが背筋を仰け反らせるようにして喘いでいた。直腸を指先でかき回される感触に吐き気をもよおした。

「こつちも物凄く締めりがいいよ」

十分後、ゆかりは、熊美によってマングリ返しにされ、膣を舐められていた。ざらついた舌が膣やクリトリスを這い回り、骨太の手で乳房を揉みしだかれた。執拗な愛撫に疼くような快感をおぼえていた。監禁されてからの三日間、陵辱につぐ陵辱を受け、精神が麻痺しかけていた。逆に快感は深く感じるようになっていた。熊美の口がクリトリスに押し付けられ、激しく吸われた。鋭い

「あああ……いいい！」

ゆかりは軽いアクメに達していた。

「いい声で泣くね。そろそろ本番といこうかね」

熊美がゆかりの愛液で濡れた顔をあげた。ゆかりの太腿を両手で押し開き、剥き出しになった膣に、巨大な張形の先端部を押し付けてきた。

「いや……。駄目。そんなことしないで……」

膣を巨大な張形で貫かれる感覚に意識が遠のきかけた。

熊美の巨体が覆い被さってきて、口に吸い付き、舌を激しい勢いで吸われた。膣の中では、巨大な張形が暴れていた。アヌスにも指を入れられていた。老人達がしたような中途半端な愛撫ではなく、徹底的なレイプに頭の中が真っ白になっていた。熊美の腰を両手で強く引きつけ

た。絶頂が迫っていた。熊美の腰の動きが一層速さを増

していた。ゆかりは舌を吸われながら、背筋を仰け反らせ、絶頂に達した。

一分ぐらいの間、ゆかりは意識を失っていた。下半身に重い疼きを覚え、意識を取り戻した。下半身に熊美と勝子が張り付いて、膣とアヌスにバイブレータを挿入しているところだった。ゆかりはバイブレータで膣とアヌスを貫かれ、スイッチを入れられた。直腸と膣との間の薄皮に振動が伝わり、気が狂いそうになるくらいの快感を与えられた。ゆかりはシーツを両手で握り締め、髪を振り乱し、泣き喚いた。勝子と熊美は欲情に濡れた膣で膣とアヌスから突き出しているバイブレータを見ていた。

第二章 極上の食材へと続く